

# 西田哲学会会報

第十六号

題字 上田閑照

発行・西田哲学会

〒九二九-1126

石川県かほく市内日角井一番地

石川県西田幾多郎記念哲学館内

電話(〇七六)二八三六六〇〇

## 会長挨拶

このたび、新理事による理事会の席上、互選で二期目の会長職を務めさせていただくことになりました。会員の皆様への感謝とご理解とご支援に感謝いたすとともに、改めて身の引き締まる思いです。非力ながら、これまで以上に会の発展のために尽力してまいりたいと思っておりますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。

さて、先だって関西大学で開催されました年次大会での会長挨拶の折、今年六月に大阪北部地震、七月には西日本豪雨と続きましたことを受け、西田が関東大震災の後に記した「大震災の後に」(一九二三年)を引かせていただきました。ところが、この原稿に向かっている九月下旬、年次大会からわずか二ヶ月の間に台風二十一号、そ

## 秋 富 克 哉

して息つく暇もなく北海道での大地震と、相次いで甚大な被害がもたらされ、またも多くの人が避難生活を余儀なくされる事態となりました。被災された方々には、改めて心よりお見舞い申し上げ、被災地の一刻も早い復興をお祈りいたします。

私たちは確かに、西田が右記「深い大きな自然」の威力の前に、頭を垂れるしかありません。ただ残念なことに、いずれの災害においても、西田が警告していたように、「深く考えて大なる計画を立てることがなかった」という事情が被害をいつそう大きくしてしまつたようです。事は自然開発の場面だけに限りません。現今の科学技術推進の計画でも、あるいは教育改革の政策でも、長期的な展望が十

分に感じ取れない方針が矢継ぎ早に出される状況は、西田の発言からもうじき百年が経とうと言うのに、「深く大きく根柢から考え貫く」ということが乏しいままであることを痛感させられるばかりです。

では、どうするべきであるのか。私たちの社会が、制度化し体制化した科学技術の巨大な力に組み込まれて動いているかぎり、その流れを押し止めることは不可能です。特効薬があるはずもありません。しかし、だからと言って、手をこまねいているわけにもまいりません。西田がエッセイを締め括っている言「深く己の奥底に還ってそこから生きて出ればよい」ということを、今こそ私たち一人一人が真摯に受け止め、自分なりに考え、そして行動していくこ

とが求められているのではないのでしょうか。

西田哲学研究の動きに目をやりますと、ご存知のように、国内では、西田の遺族によってかほく市の哲学館に寄託された未公開資料が浅見洋館長を代表とするプロジェクトで少しづ

## 西田哲学会第十六回年次大会報告

西日本を中心とし多くの被害をもたらした記録的豪雨の二週間後、平成三十年七月二十一日(土)と二十二日(日)、西田哲学会第十六回年次大会は、関西大学一〇〇周年記念会館にて開催された。両日は最高気温が三十五度の猛暑であったが、多くの参加者のもと、有意義な発表がなされ議論が交わされた。

二十一日の午前は三名の発表と『善の研究』の勉強会、午後には二人の講演が行われ、

つ資料化され、これまで知られなかった西田の姿が現われつつあります。また海外でも、アメリカ、ドイツ、フランスなど各地で、西田を軸に日本哲学をめぐる学会やワークショップが積極的に開催されています。国内外を問わず多くの人々が西田哲学に何かを求めようとしている今、時代のなかでその新しい方向性を探ってゆくこと、西田哲学会が会員の皆様とそのような機会を共有できる場となるよう、努めたいと思います。

二十二日の午前は前日と同じく三名の発表、午後には西田の根本概念「永遠の今」をテーマとしたシンポジウムが開かれた。ここでは『善の研究』勉強会とシンポジウムを除き、講演および研究発表について報告する。

### 講演

最初の講演は、木岡伸夫氏(関西大学)の「西田哲学」と私——〈邂逅〉の視点からであった。木岡氏は、ご自身がフラン



スでの西田研究会、九鬼周造、オギユスタン・ベルク、山内得立を媒介として西田哲学と取り組んでこられたことを話されながら、「二者間で閉じられることのない三者関係」の構造を示した、「ご自身の「邂逅の論理」の概要を説明された。また東西のあいだを開いたのが日本哲学の特徴であり、その日本哲学の多くの哲学者は西田哲学の「個人的変奏」であったという考えを提示された。そして「邂逅の論理」もまた、西田の「私、汝、彼」の三者関係を含んだ「無の論理」の「一変奏」であると結ぶづけられた。



続いての講演は、永井均氏（日本大学）の「死ぬことよって生まれる私と、生まれることよって死ぬ私」であった。その講演は西田の「私と汝」をめぐって、著書『西田幾多郎——〈絶対無〉とは何か』（NHK出版、二〇〇六年）を補足するかたちでなされた。永井氏は「私と汝」の理論は「すでに私や汝が成立した後の話」ではなく、対象化された「私」がはじめて成立する次元の理論であると主張された。「無の場所」としての〈私〉は「別の無の場所」という他者（汝）が出現することによって、自身もまた「別の無の場所」に「於てある」存在者としての「私」となる。それは、一方で「絶対無」という性格を否定される（比喩的には「殺される」）ことであり、他方で一つの個物として自覚される（比喩的には「生まれる」）ことである。そしてこうした私の成立、他者の成立は、等根源的に「言語」の成立



に関わっていると論じられた。お二人の講演は聴衆を圧倒するような熱意のこもったものであり、聴衆の一人一人が大きな刺激を得ることができたのではないかと考えられる。

**研究発表**

一日目の一人目の発表は日高明氏（相愛大学）の「純粹経験としての反省」であった。日高氏はジェームズやロックから西田への影響を踏まえて、「善の研究」の「純粹経験」と「反省」の関係を論じられた。両者は一面において対比されるが、「反省」もまた「純粹経験」の意味

をもつていると論じられた。二番目はErol COPEL氏（モナシユ大学）と石原悠子氏（プリンストン高等研究所）の共同研究発表「The Becoming of Becoming Anxious: from being-in-the-world to emptiness」であった。両氏は、ハイデガーにおける非本来性から本来性への移行に伴う「不安」への生成がどのようになされるかを問題とされ、さらに上田閑照氏の「二重世界内存在」の理論を援用しながら、「不安」よりも深いとされる「虚空」の状態を論じられた。

三人目の発表は喜多源典氏（関西大学）の「三木清と西田幾多郎のあいだ——「構想力の論理」の新たな方向性の探求——」であった。三木の「構想力の論理」と遺稿「親鸞」の理論的連関が従来の研究でも問題とされているが、喜多氏は、この関係を、三木の師であり三木に大きな影響を与えた西田哲学を参照しながら論じられた。

続いて二日目の発表である。一人目の発表は山中崇史氏（関西大学）の「西田哲学における華嚴思想——「理」と「事」を中心に——」であった。山中

氏は華嚴思想の「理」に裏打ちされた「事」は、西田の「絶対無」における「個物」の思想に対応するが、前者は調和的な世界だが、後者は不調和的・矛盾的な世界であると論じられた。

次に Steve LOFTS 氏（ウェスタンオンタリオ大学）が、「A Comparison of Ernst Cassirer and Nishida Kirao」というタイトルの発表を行われた。氏は西田とカッシーラーは新カント学派と生の哲学の統一という共通面があり、生と形を対立させるのではなく、形をかたちづくる生に注目する点で近しいとされた。

三人目は浦井聡氏（京都大学）の「他者のための「死」——田辺元の宗教哲学における絶対転換について——」である。浦井氏は『キリスト教の弁証』を主として、田辺哲学における「救済」を論じられた。浦井氏によれば、田辺は、単なる自分だけの救済ではなく、他者の救済の実現を目指しているものであり、田辺の宗教観は倫理実践と緊密に関わるものであった。

以上のように本年次大会も充実した発表・講演がなされた。今後さらなる発展が期待される。（文責・太田裕信）



シンポジウム報告

「永遠の今」

田中久文

大会二日目の二十二日の午後、例年通りシンポジウムが開催された。今年のテーマは「永遠の今」であった。前もって、九鬼周造の時間論を補助線として使うようにという理事会からの指示があった。そこで、まず石井砂母重氏（跡見学園中学校高等学校）に西田について、次に宮野真生子氏（福岡大学）に九鬼についてご発表頂き、最後に松本直樹氏（明治大学）に西田と九鬼をつなげて頂くということになった。いずれも、今後の日本哲学研究を担っていかれるはずの実力派のホープである。

第一提題者の石井氏は、「永遠の今」と死の自覚——不在の反復をめぐって」と題して、西田の時間論について、「永遠の今の自己限定」という言葉が初めて登場する『無の自覚的限定』を中心に発表された。西田は、時間というものを無限の過去から無限の未来への直線的進行として捉える立場では、時間

はつねに過ぎ去るものとなってしまい、そこには時間の「不在」が生まれてしまうとす。そこで西田は、アウグスティヌスの時間論を下敷きにしなから、過現未のすべてを「包む」時間というものを考える。ここでは、時間は対象化できるものではなく、自覚的な自己形成のなかで初めて掴まれるものとなる。具体的には、「行為」というものによって、「不在」（究極的には「死」）を孕みながらも、掴まれるはずのない時間が、奇跡的に掴みうるのだという。そうした「行為的自己」が徹底されるなかで、「主語的自己」は解体し、世界を映す「表現的自己」へと変貌する。そのとき、各自の時間が一切の時間、すなわち永遠を映し合うことになる。ただし、それは、各自が「絶対的他」に晒されることをも意味している。そこでは、「永遠の今」における「無限の足踏」のなかにありながらも、自己は亀裂を含む「痛み」として反復されると

いうのだ。以上の議論を踏まえ、氏は最後に、愛する者の死をどう受けとめるべきかを問題にする。「過ぎ去った汝」との邂逅を、氏は「現在における過去の受け取り直し」として理解し、それが最終的には、死者の生者への「受肉」を通しての「アガペ」へと極まってくるとする。

第二提題者の宮野氏は、「言葉に出会う現在——永遠の本質を解放する——」と題して、九鬼の時間論について発表された。九鬼において「永遠の今」というものが、「偶然性」の根底で開示されるそれと、「回帰的時間」におけるそれとの二通りに説かれていることを氏は指摘する。前者は日常経験に基づくものであり、後者は形而上的・神秘的体験に基づくものであるという。まず、「偶然性」の根底で開示される「永遠の今」とは、「現実が生まれてくる生成の動性それ自体を掴む」ことによつて生まれるものだという。それは、何らかの力の働きによつて「触発」されることによつて実現する。それを九鬼は「瞬間としての永遠」とよぶが、その場合の「永遠」とは、「実体」や「本質」といったものではなく、人間の力ではコントロール

できない「生命の力」ともいえるものもたらすものだという。次に、「回帰的時間」における「永遠の今」とは、時間の始まりと終わりが結びつき円を描いて無限に繰り返される時間を掴むところに生まれるものである。その背後には、繰り返しの運動を起こす「潜勢力」というものが考えられるという。しかし、こうした意味での「永遠の今」は「形而上学的時間」であり、通常の生活でアクセスすることはほとんど不可能だと氏は考える。以上のような二つの「永遠の今」について述べた後、両者の結節点、すなわち「現実が生成する偶然の消えゆく一瞬」と「時間全体が繰り返すことで凝縮される現在」という二つの時間経験が交わりうる場所として、詩的言語特に押韻論を問題にする。氏によれば、そこに現れるのは、「存在そのものを開示する言葉のもつ潜勢力、その根底にある生命の力」であるという。

第三の提題者の松

本氏は、「くり返す時・消え行く時」という表題のもとに、ハイドガーを橋渡しとして西田と九鬼の時間論を比較している。氏によれば、西田において時間は、「消滅する」ことと「滞留する」ことという相矛盾する性格を併せもっている。そうした二面性が両立しうるには、アウグスティヌスのいう「過現未を包む現在」としての「永遠の今」を「無の一般者」と重ねて考えるしかないという。そう考えることによつて、時はいったん完全に「消滅」し、現在が過去から切り離されると同時に、自己





が「自由に行為する自己」となることによって、時はどこまでも蘇るものとなる。そして、そここそ真の永遠が生まれるという。氏によれば、そうした時に対する見方はハイデガーにもある。ハイデガーにとって「死」は水平的な時間の拡がりのうちではなく、そうした拡がりを「垂直的に抹消するような否定性」のなかで考えられている。さらに、そこに「回帰的時間」を「垂直的なエクスタシス」と捉える九鬼との関連も考えられるという。しかし、氏は九鬼の「回帰的時間」については批判的である。それは「経験のある種の質をことさらに表現し、享受するための芸術的な構想の産物」に過ぎなかったという。実は、「回帰的時間」とは、人間の生涯の

### 『善の研究』講読報告

大会初日七月二十一日(土)の午前中に、入門講座として『善の研究』の講読があった。今年度は第二編の第五章を読んだ。担当講師は、竹花洋佑と熊谷征一郎の二名であった。第五章を前半と後半に分け、前半は熊谷

一回性を強調するための概念装置だと九鬼は述べている。それに対して氏は、そうしたことを自分に声高に言い聞かせているような九鬼の姿勢を批判し、上田閑照氏の文章を引用しながら、「ただ生きる自己」を受容することこそが重要なのではと結んでいる。

以上、どの提題も内容豊かでの力の籠もったものであり、その後の質疑応答も活気を帯びていた。九鬼の理解をめぐって、宮野氏と松本氏の間で激しい議論が交わされたのはいうまでもない。時間論という西田哲学のなかでも最も難解なテーマに関して、今回さまざまな視点からの理解が深まり、有意義なシンポジウムであった。

が、後半は竹花が担当した。本報告においても、前半の報告は熊谷が、後半の報告は竹花が執筆する。

第五章の前半では、『善の研究』における重要な概念の一つが提示されている。それは、

「統一的或者」という概念である。この概念については、大学における講読においても学生から質問が出てくる。今回の講読においても、主にこの概念について解説がなされた。『善の研究』の叙述にしたがって、ある物体から他の物体に力が伝わる例や、赤い色が青い色から区別されて現れる例、樹の生命力とその枝葉根幹との関係の例に即して、「統一的或者」について説明がなされた。

参加者からは、さまざまな意見や疑問が活発に提示された。たとえば、「西田は、〈原子のよいうな、真に単純で独立した要素は説明のために設けられた抽象的概念にすぎず、実際には存在しない〉と言っているが、原子を顕微鏡で見ることができないか」という意見や、「西田は、個物と個物のあいだの〈対立〉や〈矛盾〉をくり返し強調しているが、個物同士が共同的に働くこともあるのではないか」という意見である。これらをはじめとする様々な意見は、担当講師にとっても、西田の考えを新鮮な観点からあらためて捉え返す機縁になった。前半の報告は以上である。

(文責：熊谷征一郎)

### 第五章の後半部

においては、前半において提示された「統一的或物」が実在のものとしての「根本的方程式」であることが主張されている。ここでの解釈のポイントが、「一なると共に」多、多なると共に「一」という後年の西田哲学を彷彿とさせる言い方をどのように理解するかということになる。それは他への関係が同時に自への関係でもあるような意識のあり方を指し、その際西田はジェームズの意識の流れをめぐる議論を下敷きにしていく。このことを「純粹経験に関する断章」の西田の叙述を手掛かりに説明した。他のもへの関係がどこまでも自己との関係を離れないという発想を根本に置くことで、実在の自己自身による発展という考え方が出てくることを報告者は強調した。

報告の間に質疑の時間を多く挟むことによって、議論は活発になされたと言える。特に質問や異論が集中したのは、西田が



実在の内面的必然に基づく発展を自由と見なしている箇所である。果たしてこれが自由であると言えるのかという疑問は正当なものであり、西田理解を離れても自由と必然性という極めて大きなテーマである。そこでさらに議論を深めることが望ましかったが、残念ながら時間の関係上、『善の研究』の他の箇所を引きながら、西田の自由概念の理解を補足することに止まった。

(文責：竹花洋佑)



エッセイ

Awakened Realism

石原悠子

二年ほど前、その後の私の西田哲学との関わり方を根本のところまで大きく動かすような一つの出来事があった。当時私はコペンハーゲン大学の主観性研究センターというところで、西田とハイデガーに関する博士論文をなんとか提出し、三ヶ月後

にある口頭試問を残すのみだった。提出の少し前に、あるご縁でお会いしたアメリカのプリンストン高等研究所の先生が、数ヶ月後にニューヨークであるという先生主催の一般向けのトークシリーズに登壇者として招待してくださった。ちょうど口頭試問の二週間前だった。

それまでアカデミックの世界の中で、しかも哲学という分野の中でこじんまりとやってきた私にとって、多種多様な背景を持つ一般の方々に講演をすることはほとんどもなく緊張を強いられることだった。しかもトークは二十分間と短く、その後質疑応答が四十分間あると言う。色々悩んだ結果、私が博論の

中で「awakened realism」と呼んだ西田の立場について話すことにした。

私はまず日常的に日本語で使う「〇〇としての自覚」という言い回しを紹介し、すでにこのような言い回しのうちに自覚の場所的性格があらわれていることについて話した。例えば、母親として自覚を持つためには我々は母親のあり方というものを規定している社会的・文化的コミュニティの場が開かれていなければならない。英語では、自分の所属するコミュニティや他者との関わりにおける自分の立場を見出すことを「find one's place」と表現するが、自覚とは場所的自覚であるため自覚することは文字通り finding one's place なのである。だが、このように社会的・文化的あるいは歴史的に形成される「〇〇としての自覚」とは別に、例えば美しい月に魅了された瞬間、「見ている私」がいなくなっていたただ月のリアリティに満たされるという経験をすることがある。そのとき月に対峙する私としての自覚や普段の様々な我々のあり方を規定する〇〇としての自覚が抜け落ち、かえってそれらの自覚を持ちながらも、根本においてはそのいずれでもない、という否定的自覚が芽生える。普段の自覚において見出される世界のリアリティは様々な色眼鏡を通して見られているが、我々は否定的自覚において西田が言うところの「真の实在」、すなわち月が月のリアリティにおいて自己実現(西谷)することができるのではないか。主客二元論の色眼鏡を通して見ながらもそうと知らずに見ている立場を素朴实在論の立場とし、色眼鏡が世界を世界として構成していると言う自覚が深まった立場をカント的な超越論的観念論の立場とすれば、色眼鏡が様々な实在を形成していることを認めただ上で、なおかつ色眼鏡が外れたところに真實在を認めるさらに自覚の深まった西田の立場を——リアルなリアリティに目覚めるという意味で——、awakened realism と呼んだ。

トークをやってみてまず驚いたことは、六十名ほどいた聴衆

皆が無名の私の話に英語で言うところの all ears のように、一心になって聞いて下さったことであつた。普段慣れている研究発表では相手のために話すというよりも自分のために自分の研究成果を話すことが多いため、聞いている側も単純に聞くという姿勢を持つていることはそう多くない。だがこの聴衆は私の拙い話を真つ直ぐに聞き、自分たちの経験に照らして非常に深く鋭い質問をしてきた。そして驚くことに思ったよりも多くの人が西田の实在観に共鳴し、それ以来西田に関心を持つて一生懸命 *An Inquiry into the Good*

エッセイ

地球の反対側の日本哲学

ブラジルにおける東洋思想とその歩み

Felipe Ferrari Gonçalves (名古屋外国語大学)

二〇〇八年のある汗ばむ陽気の春の日に、私は「京都学派」という言葉を初めて耳にした。もちろん、日本の技術や日本ポップ文化は他の国と同じようにブラジルにおいてもよく知られている。しかしながら、サンパウロ郊外の日系移民の影響が色濃

く残る地域においてでさえ、私は日本哲学が存在するということを今までに一度も聞いたことがなかった。当時、私はサンパウロ州立カンピナス大学(UNICAMP) 学部生であり、アリストテレスとピロポノスにおけるトポスの概念についての卒

〔善の研究〕の英訳)を読んでいるというメールをもらった。当時博士課程の終わりに差し掛かり、難しい術語を使いこなして専門家の間だけで話すことがイコール哲学になりつつあった私にとって、哲学することの本当の意味とその楽しさを再発見することができた有難い機会だった。そして今後は自分のために研究するというよりも、より多くの人に西田哲学の面白さを知ってもらい、それによって少しでも多くの人の实在観が広がるような、そんなきっかけを作る研究者になりたいと思つた。



業論文を執筆中であつたため、ある日本人哲学者の「絶対無の場所」についての発表を聞いた時、私の中のアリストテリアン的感覚は、それを全く受け入れることができなかつた。その発表が行われたのは、日本思想研究会主催の「第三回ブラジル日本哲学会大会」であつた。

実際は、その日がブラジルにおける日本哲学史の第一目であつたわけではない。学会の主催者であつたクロアチア生まれのブラジル人 Zeljko Lopatic (ジェリコ・ロパリヒ) 先生は、一九九七年十一月から一九九八年二月までの計四か月間京都に滞在し、京都学派とハイデガー哲学の関係について研究をした。その後、二〇〇五年後半に Lopatic 先生は、八名の UNICAMP、教皇庁立カトリック大学 (PUC)、そしてブラジル現象学会 (SBF) 研究者と共に研究会を立ち上げたのだが、ウイニコット精神分析学会館 (IBPW) での彼らの集会は以下の三つの目的を持つていた。(i) 日本文化の中心点を理解すること、(ii) 現実において、西洋や東洋に存在する根本的な問題を分析すること、(iii) ブラジルの観点から以上の二

つの目的を考えることである。

二〇〇八年、その頃は単に日本哲学に関心がある学生であつた私が初めて参加した学会は、関西大学の井上克人先生と防衛大学の轟孝夫先生が初めての日本人学者として招待された学会であつた。その学会は UNICAMP で開催され、参加者は二十名程であつた。わずか三年の間に、研究者の参加が八名から二十名に増したということからは、特筆すべきことである。その二年後の二〇一〇年には、私はもうただの日本哲学に関心がある学生ではなくなつていた。文部科学省奨学生として、日本の大学院で日本哲学を研究することが決まつたのである。その年、ブラジル日本哲学会がブラジル東洋哲学会に名称変更し、研究会の新しい会長 Antonio Florentino Neto (アントニオ・フロレンティノ・ネット) 先生が、秋富克哉先生を招待したのだつた。

二〇一一年は『善の研究』の出版一〇〇周年の年で、その年に私は日本での留学生生活を始め、Florentino 先生はブラジルの学者が東洋哲学についてのエッセイとポルトガル語の翻訳版を出版するために PHI 出版

社を設立した。二〇一二年、PHI 社は UNICAMP の Oswaldo Giacoia Junior (オスヴァルド・ジアコーイア・ジュニオール) 先生が編集した『ハイデガーと日本哲学』という書籍を出版し、翌年に、『絶対無とヒリズムの克服——京都学派の哲学的基礎』を出版した。二〇一四年には、ドイツで UNICAMP 出身の Lucas dos Reis Martins (ルーカス・ドス・ヘイス・マルチンス) 氏が他の国の研究者と共に「欧州日本哲学研究会」(ENOJP) を立ち上げ、二〇一五年にバルセロナで学会初の大会が行われた。実際に、二〇一五年はブラジルにおける日本哲学の転機であつただけでなく、東洋哲学の研究の転機でもあつたと考えられる。九月に、Florentino 先生は主催者として「第四回ブラジル東洋哲学会大会」を開いた。

Florentino 先生、Marcos Lutz Müller (マルコス・ルッツ・ミュラー) 先生や Giacoia 先生は、他の研究者と共に「全国哲学大学院会」(ANPOF) というブラジルや中南米での最大の哲学学会に「東洋哲学研究会」(GT-ORIENTAL) を登録し、それによってブラジル哲学

界は遂に日本哲学への扉を開くこととなつた。GT-ORIENTAL の議事録によると、研究会の目的は「ANPOF の哲学的な空間の中で、東洋で議論されている問題を取り扱い、西洋哲学界と東洋哲学界の対話を提供すること」である。二〇一六年に行われた ANPOF の「第十七回全国哲学大会」においては、GT-ORIENTAL には二十六名の担当教授や研究者が登録されていた。同年に、『善の研究』が Joaquim Antonio Bernardes Carneiro (ジョアキム・アントニオ・ベルナルデス・カルネイロ) 先生によって翻訳され、PHI 社は日本哲学で最も議論されている作品の初のポルトガル語訳を出版した。

二〇一七年、私は約十年ぶりに出身大学での東洋哲学会大会に参加した。しかし、今回はエキゾチックな哲学に興味をもつ学生ではなく、招待された日本代表の研究者として参加した。発表者、パネリスト、全ブラジルの学部生、大学院生と教授を含め一〇〇名以上が大会に参加した。ブラジルでは日本と同じように、哲学の研究には多くの妨げがあるが、その一方で、現在には多くの学者、学生や愛好家

によって、日本哲学はブラジルの哲学界においてヨーロッパの哲学的伝統と同じように見られ尊敬されていると考えられる。日本の反対側にある熱帯国、ブラジルにおいても、日本哲学についての明るい未来を見ることができようであろう。

第六期(十八〜二十年度)理事選挙結果  
郵送にて五月三十一日締め切りで行われた西田哲学会理事選挙につき、西田哲学会事務局である石川県西田幾多郎記念哲学館において六月八日午後二時より開票と集計作業を行った結果、届いた投票用紙(十名まで記載可能)が四十六枚、有効投票は四五八票となり、次の二十一名が当選となりました。(得票数順、同数の場合は五十音順)

**理事選挙結果**

秋富克哉、美濃部仁、氣多雅子、大橋良介、藤田正勝、水野友晴、板橋勇仁、浅見洋、森哲郎、上原麻有子、田中久文、岡田勝明、上田閑照、小坂国継、井上克人、松丸壽雄、田中裕、米山優、田口茂、石井砂母亜、大熊玄

(文責：中嶋優太)



理事会報告

平成三十年度

第一回理事会(旧理事会)

西田哲学会第十六回年次大会の開催にあわせて、七月二十一日午後十二時四十分より、関西大学一〇〇周年記念会館第二会議室にて、平成三十年度第一回理事会が開催された。出席理事は十九名(委任状出席三名を含む)、理事以外に幹事十名が出席した。

●第十七回年次大会について

二〇一九年七月二十日(土)～二十一日(日)に東京方面にて開催することを総会に提案することが決定された。

●第六期理事選挙について

事務局の中嶋優太幹事から、第六期理事選挙の結果が報告された。

●編集委員会報告

田中久文編集委員長から

(1) 年報第十五号の刊行状況(刊行済)

(2) JStage を利用しての年報の電子化・公開手続きの進捗状況が報告された。

●事務局報告

(1) 平成二十九年度会計報告、ならびに平成三十年度予算案が提示され、承認された。

(2) 入退会希望者・死亡退会者・除籍候補者・消息不明者が報告され、承認された。

●電子掲示板の運用について  
会員向け電子掲示板の設置が提案され、投稿資格や管理権限について審議が行われた。

●第二十五回世界哲学会議への協力について  
日本哲学会からの要請を受け、日本を開催候補地として五年後に予定されている右会議に、財政的な関与をともなわない「協賛」という立場で参画することが決定された。

平成三十年度  
第二回理事会(新理事会)  
年次大会終了後の七月二十二日(日)午後五時十分より、関西大学一〇〇周年記念会館第二会議室にて、先の選挙で選出された新理事による平成三十年度第二回理事会が開催された。出席理事は十九名(委任状出席四名を含む)、理事以外に幹事七名が出席した。

●新体制について  
(1) 会長の選定・理事による互選の結果、秋富克哉理事が再任され、就任した。

(2) 委嘱理事選任・ロルフ・エルバーフェルト氏、エンリコ・フォンガロ氏、ブレッ

ト・デービス氏、林永強氏、斎藤多香子氏、白井雅人氏に就任を求めることが決定された。

(3) 先の選挙で理事に選出された上田照照氏の理事会への継続的な出席が年齢ゆえに困難であることが予想されるため、本会への多大な貢献をも考慮し、理事ではなく特別会員という資格で本会に関与していただくことを要請してはどうかという提案がなされ、本人の意向を確認することが決定された。

(4) 編集委員選任・編集委員長に水野友晴理事、副委員長に井上克人理事、委員に上原麻有子理事が選任された。残り二名は以上の三名で協議のうえ、秋の理事会で提案することになった。また、査読の一部を編集委員以外の理事にも委嘱する方針が確認された。

(5) 会計監査・杉村靖彦氏、小林信之氏に就任を要請することが決定された。

(6) 幹事・前期の幹事全員が再任され、追加の幹事も考慮されることになった。

十月七日(日)に京都工芸繊維大学にて開催されることが決定された。

●第十七回年次大会について  
鎌倉女子大学・日本女子大学・中央大学を開催候補地とすることが決定された。

(文責：松本直樹)  
「西田哲学研究基金」について

二〇一七年度、第十三回の西田哲学研究基金公募には一件の応募があり、厳正な審査の結果、以下の出版事業に三十万円を交付することになりました。

JCMaraldo 氏  
Japanese Philosophy in the making I Crossing Paths with Nishida (Chisakuro Publication)

今年度も引き続き、交付基金を公募します。一件につき三十万円から五十万円、数件の採択を予定しています。西田哲学に係るテーマ研究のほか、翻訳出版、研究のためのプロジェクトも応募の対象になります。過去に不採択になった場合でも、内容を整えて再申請することは可能です。応募要領は以下の通りです。

(i) 提出書類  
①履歴書、②研究計画(八百字程度)、③翻訳出版の場合は

出版社との契約書。

(ii) 提出先

原則として次の宛先に電子メール添付でお願いします。

akiyomi@kjac.jp

(郵送の場合は、

〒六〇六-八五八五

京都市左京区松ヶ崎

橋上町1

京都工芸繊維大学

秋富克哉研究室)

(iii) 締め切り

二〇一九年三月三十一日(日)必着。

(iv) 備考

① ほぼ二年以内という目処で、研究成果報告を提出していただきます。

② 翻訳出版の場合は、訳稿完成を前提に出版社との契約がなされることが通常のなかで、ほぼ一年以内に出版図書の見本を提出していただきます。助成金は出版社に渡されます。助成金交付の際には、出版書籍に本西田研究基金からの助成を受けた旨を印刷記載してください。また出版図書二冊を本基金に寄贈して頂きます。

③ 研究成果の提出は、刊行物のコピー、抜き刷り、あるいは四千字程度の報告文書の



いずれか、とします。提出先は、上記の秋富研究室です。(文責：西田哲学研究会基金運営委員会二〇一八年度代表・森哲郎)

西田哲学研究会のご案内

西田哲学研究会「於京都」西田哲学研究会は、オープン参加のもと、ほぼ三ヶ月に一回のペースで西田の著作に取り組んでいます。「善の研究」を十回かけて読み終え、続いて『自覚に於ける直観と反省』、『意識の問題』、『芸術と道徳』の主要箇所をそれぞれ数回取り上げました。その後『働くものから見るものへ』はほぼ全論文を扱い、あと一回で最終論文「知るもの」を読み終えます。基本姿勢は精読と徹底的な議論、今後この方針を進めて行くつもりです。連絡先は左記です。

幹事：秋富克哉 (akiomi@kit.ac.jp)

案内は、原則としてメールで行ないますので、参加ご希望の方は、このアドレスまでふってご連絡下さい。お問い合わせ等もお待ちしております。

(文責：秋富克哉)

山口西田読書会「於山口」

原則毎週土曜日十三時三十分から十五時四十五分まで(最初

の十五分は掃除)西田旧宅で開催。九月十五日で一八一回を数える。テキストに即しつつ、西田が考えようとしたことを共に哲学する空間です。テキストは進行役の佐野が準備しますが、主役は参加者です。毎回参加者の一人がプロトコル(議事録)を作成し、それに関する哲学的問いを用意。これまでに『善の研究』全編、『思索と体験』『自覚に於ける直観と反省』より数編を読了し、現在『働くものから見るものへ』の全編を講読中。HPをご覧ください。

連絡先は info@yamaguchi-nishida.org (文責：佐野之人)

『西田哲学会年報』の電子化についての公告

西田哲学会ではこのたび『西田哲学会年報』(以下『年報』)の下記のような条件での電子化を決定しました。これに伴って、公開の可否について会員のみならず、ご自分の記事(講演録・シンポジウム・公募論文・書評・その他)の公開に同意されない方は事務局にご一報ください。この公告の期間に、特にご連絡のない記事については電子化に

よる公開をいたします。

- 1. 電子化による記事公開は、CNI(国立情報学研究所)とJSTAGE(科学技術振興機構の情報発信・流通総合システム)に登録してPDFによって『年報』刊行の一年後に行う。過去のバックナンバーも順次電子化して公開する。
2. 掲載した記事は、CNI Articlesにて検索が可能になる。
3. 『年報』の編集著作権は学会に属する。個々の著作物の著作権は執筆者に属するが、刊行してから電子版公開までの一年間は、再録・WEB公開を執筆者が希望する場合、編集委員会に諮るものとする。
4. 『年報』掲載記事の電子的公開に同意されない場合は二〇一九年十二月末日までに申し出てもらう。また、PDFの掲載後も、本人ないしは遺族の申し出により、いつでも公開を止めることが可能である。

『西田哲学会年報』掲載論文の公募について

『年報』巻末の応募要領にしたがってご投稿ください。たくさんの方の応募をお待ちしております。なお次の第十六号掲載分

は、編集の都合上、平成三十(二〇一八)年十二月末をもって一つの区切りといたしますのでご了承ください。また、西田哲学会編集委員会では、近々詳細な執筆要領を定める予定です。投稿の際は会報やホームページもご確認下さい。

「年次大会」における口頭発表の応募について

第十七回年次大会(二〇一九年七月開催)の口頭発表者(日本語または英語)を公募します。発表希望者は、来年三月末までに、八〇〇字程度の要旨と簡単な経歴・業績表を添えて事務局にお申込ください。

英語掲示板の運用開始について

西田哲学および日本哲学について

編集後記

今号から編集委員は、石井砂母亜、井上克人(副編集委員長)、上原麻有子、白井雅人、水野友晴(編集委員長)が務めることとなりました。

今期の仕事としては、『西田哲学会年報』のバックナンバーを電子公開することが含まれております。編集委員補佐の森野雄介さんの協力も仰

いて、国内外のネットワークの形成を促進するため、ウェブ上で英語の掲示板の運用を開始しました。関連する研究会や出版物の情報に掲載される予定です。西田哲学会ウェブサイトにバナー「network」をクリックするとご覧いただけます。URLは http://network.nishida-philosophy.org/wp/ となります。

上田閑照氏、文化功労者

本会初代会長で現在特別会員の上田閑照氏が、文化功労者に選ばれました。ドイツ神秘主義と禅仏教に関する哲学研究とそれに基づく国際貢献で顕著な業績を挙げたことが評価されました。

いで、これを進めてまいります。

西田哲学会でも国際的な研究や交流が盛んになって参りました。その様子は今号のエッセイからも窺えます。会の発展の一助となりますよう、編集委員一同、三年間努力してまいりますので、ご協力よろしくお願い申し上げます。

(編集委員長 水野友晴)